

服部百音が本格的な海外デビュー

EU ユース管弦楽団ツアー

4月9日●ペルージャ・ムジカ・クラシカ
取材・文=中 東生

今年の1月にスイスの首都ベルンで開催されたボリス・ゴールドスタインコンクールでグランプリを受賞した服部百音が、EU ユース管弦楽団の春ツアーでメンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」を弾き、本格的な海外デビューを飾った。スイスのインターラーケン・クラシックでの初日をスタンディング・オベーションで飾った後の、イタリア、ペルージャ・ムジカ・クラシカ取材した。

モーツァルト「交響曲《ハフナー》」で始まったコンサートツアー4日目の4月9日、前の公演地、エクサンプロヴァンスからバスで10時間かけて移動した疲れが出ていたのか、オーケストラの集中力が欠けている印象を受けた。音楽監督のヴラディミール・アシュケナージは、若い世代との共演を全身で楽しんでいて、細部の音楽的完成度には重点を置いていないように思われた。

そこに、くすんだピンクのバラが散りばめられた、お人形のようなドレスに身を包んだ服部百音が登場した。可憐な童童といったその雰囲気が、演奏し始めると一変し、非常に大人びたアプローチで聴かせた。すると、ユース・オーケストラの甘えが舞台から消えた。集中力が増し、音楽がどんどん引き締まっていった。しかし、ピンと張りつめているわけではない、程よい脱力感が彼女の強みであろう。この曲の全曲演奏は、服部百音にとって今回が初体験というのが信じ難い。

会場のモルラッキ劇場は音が混ざりにくく、聴衆も幅広い年齢層で完全な静寂を提供してはくれなかったのだが、彼女の集中力はメンデルスゾーンの世界にだけ向けられていた。自ずから響いてはくれないヴァイオリンの音を、体全体で膨らませてフレーズを盛り上げる時も、甘美な旋律に最大限のヴィブラートをつけて歌わせる時も、華麗なヴィルトゥオジティを披露して、多

少走り気味になるほどの速度で聴衆をエキサイトさせる時も、必ず緊張感の直後に脱力する間を与えてくれるので、音楽が窒息しない。

師のザハール・ブロン直伝なのか、15歳の少女が、何を表現しようとするか、どのような演奏になるのだろうか。

「ブロン先生からはメインの音がどれなのか、目立ってはいけない音などの分析を徹底的に教

わった。先生のように弾くためには、脱力できていないと不可能で、まだまだ力が入り過ぎてしまうところがある」と自己分析する彼女は、テンポなどの打ち合わせも念入りに行ってくれたアシュケナージの温かい人柄に守られて、「緊張感が残っていた初日より、この2日目の方が楽しめた」と語る。そんな楽しいひと時を結ぶ最後のクライマックスでは、全ての技術を駆使して、音楽的にも爆発させ、アシュケナージとデュエットを踊っているような緊張感と相乗効果で弾き切り、感動の涙を誘った。

ユース・オーケストラの団員を始め、アシュケナージまでもが服部百音に惹き付けられ、高められていた。聴衆だけでなく、共演者達からも心からの賞賛をこめて、舞台に何度も呼び戻され拍手喝采を浴びる彼女は、まだ15歳のあどけない少女に戻って



これが服部百音のデビューとなった



ユース・オーケストラの「甘え」を消し去った、集中力のある演奏

いた。休憩中、アシュケナージは満足気に次の共演を切望するコメントを発し、後半はメンデルスゾーンの「交響曲第4番《イタリア》」が演奏されたが、服部百音が吹き込

んだ表現力を維持したまま、明確な方向性を持って演奏された素晴らしい出来映えであった。

■公演情報

〈日時〉8月21日18時30分 〈会場〉東京芸術劇場
〈曲目〉メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」〈共演〉下野竜也指揮読響 〈問合せ〉0570・00・4390



聴衆をはじめ、共演者からも拍手を浴びた